安全・安心な環境で「なぜ」を問い続け、社会で求められる読解力を育む

つくば言語技術教育研究所 所長 三森ゆりか（さんもり） × 北海道・市立札幌藻岩（もいわ）高校 對馬光揮（つしまこうき）

社会ではどのような読解力が求められるのだろうか。そしてそれは学校という場で、どのようにして育むことができるのだろうか。海外の国語教育に精通し、日本人の言語技術の向上のために活動する識者と、独自の指導法で読解力の育成に取り組む国語科教師が語り合った。

「言葉の力」の差を生み出す日本と欧米の国語教育の違い

三森　私は、全国の学校、スポーツ団体、民間企業などを対象とした、独自のカリキュラムに基づく言語技術（Language Arts）の教育・研修活動を行っています。言語技術とは、言葉の用い方を技術として捉え、語彙やつづり、文法、内容や文脈を踏まえた思考を論理的に組み立て、分かりやすく表現する作文技術や読みの技術など、言葉を操るための学びの体系を指します。

私の活動の原点は、中学校から高校時代にかけて過ごしたドイツでの経験にあります。現地の学校での学習にとても苦労したのですが、その原因は言語の壁ではありませんでした。ドイツ語が分かるようになっても、大量の文章を読み、その内容を基に議論したり、自分の考えを論述したりする課題についていけなかったのです。一方、欧米諸国から来た生徒は、ドイツ語のレベルが私と同程度でも、そうした課題を難なくこなしていました。私は、彼らが数学のように、共通のスキルを学習しているのではないかと考えていました。

帰国して大学を卒業した後は、商社に勤めました。そこで私は、欧米のビジネスパーソンが議論の運び方や文書の作成などに長け、日本人よりも成果を上げている現実を目のあたりにしました。そうした状況は国語教育の違い（**図1**）によって生じていると考え、私は、言語技術の教育を自分の活動とすることに決めました。

欧米諸国では、幼少期の言語教育から体系化されています。例えば、就学前の読み聞かせでは、「なぜ」「どうして」と絶えず子どもに問いかけながら読むことで、分析的な読解、いわゆるクリティカルリーディングの芽を育みます。小学校に入ると、物語を自分の言葉で再現するリテリングなどに取り組んで、読解や作文の基礎を学び、学年が上がるに連れて自分の解釈をエビデンスに基づいて表現する方法を身につけていきます。中学校や高校ではより高度な要約や解釈が求められるようになりますが、エビデンスベースであることに変わりはありません。そうした学びが大学での論文やビジネスにおける議論の組み立て、文書の作成などを支え、グローバルに活躍できる状況を生んでいるのです。

對馬　欧米諸国では、初等中等教育において読み書きの力を体系的に育成しているのですね。

三森　その通りです。これだけグローバル化が進むと、国際レベルの読解力を身につけていなければ、様々な面で不利にならざるを得ません。

読解力の不足が人間関係のトラブルに発展

三森　読解力は社会人にとって必須の資質・能力です。ビジネスの成果を左右する読解力とは、読めて書ける力を指します。読むことはクリティカルリーディングができる、書くことは必要

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

な情報を誰が読んでも分かるように論理的に組み立てられることを意味します。読み書きは表裏一体で、読めるから書けるし、書けるから読めるという関係にあります。

對馬　私は読解力とは、「主張」と「根拠」を理解する力と捉えています。相手が何を伝えようとしていて、それはなぜなのかという2点を押さえられれば、大きな誤解は生じないからです。さらに、自分の言葉で表現し直せると、なおよいと考えています。

三森　相手の主張を理解するという点においては、文章でも口語でも主張が明確に示されるとは限りません。意図的に不明確にする場合もあります。そういった曖昧な表現の中の主張や真意を読み解くことも、社会では求められます。そこで役立つのが、文学を通した学びです。文学作品では作者の意図が明確に示されることは少ないため、限られた情報から相手の意図を読み取る力を育成するのに格好の教材です。

對馬　同感です。文学作品を読んで自分が解釈したことを生徒同士で語り合ったり、自分の解釈を超えるために優れた批評論文を読んだりするプロセスは、社会で求められる読解力を養う上でも有用であると考えています。新課程では文学作品を扱う機会が減りましたが、個人的にはもっと増やしたいと思っています。

つくば言語技術教育研究所　所長
三森ゆりか　さんもり・ゆりか

中学校から高校にかけて4年間を旧西ドイツで過ごした経験などから日本の国語教育の課題に気づき、ドイツの母語教育をベースに言語技術を育成するカリキュラムを開発。全国の学校、民間企業、日本オリンピック委員会や日本サッカー協会などのスポーツ団体で言語技術の指導にあたってきた。文部科学省「読解力向上に関する検討委員会」などの委員を歴任。著書に『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』（大修館書店）など多数。

北海道・市立札幌藻岩高校
對馬光揮　つしま・こうき

同校に赴任して2年目。国語科。2020年度に「国語科における教科横断型授業の可能性」をテーマとした実践で、第69回読売教育賞国語教育部門最優秀賞を受賞。若手教師による対話のコミュニティー「若手教師・教育創造MTG（**巻末の「編集部からのお知らせ」で紹介**）」のメンバー。

学校概要

設立　1972（昭和47）年
形態　全日制／普通科／単位制／共学
生徒数　1学年約240人
2023年度卒業生進路実績　国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、北海道大、岩手大、埼玉大、東京学芸大、横浜国立大、琉球大などに106人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ311人が合格。

図1

欧米諸国の国語教育の例

- 教科書に掲載される短いテキストにとどまらず、丸本（本一冊）も頻繁に扱われる
- 読解のためのスキルを授業で指導する
- 議論を通してテキストを読解する
- 書かれた事実に基づいた論証を行いながらテキストを読解する
- 解釈は１つではなく、複数の解釈が成立する
- 読解後作文（感想文ではなく小論文）に取り組む
- 母語以外の教科、歴史、現代社会、哲学、経済、倫理、宗教、外国語などでもテキストを巡って議論し、読解し、作文（小論文）に取り組む

※文部科学省「言語力育成協力者会議（第１回）」での三森氏の説明を基に作成。

生徒に文学作品を英訳させて深い解釈を促す

對馬　長い文章で読み落としがあったり、質問されたことの真意を読み取れていなかったりするのが、生徒の読解力の現状です。短文で即時的にやり取りするSNSの普及や、読書時間の減少が高校生の読解力に影響を与えていると考えられていますが、上級学校や社会に送り出す立場としても、読解力の育成の重要性を痛感しています。

　そうした生徒の状況を踏まえて、私は国語の授業の中で、読解力の育成のための様々な取り組みをしてきました。例えば、文学作品を使った実践では、芥川龍之介の『羅生門』を題材とした授業があります（**P.24実践例**）。同授業は、英語科との教科横断型で実施し、作品の最後で登場人物の下人が発した「きっと、そうか。」という言葉を英訳する活動を通して、作品を深く解釈することを目指しました。

　また、評論『暇と退屈の倫理学』を読み、本文の内容を図解する授業にも取り組みました。授業後、生徒からは「図解するにあたって、著者の主張は

何か、その根拠はどこに書かれているかを意識しながら文章を読んだ。普段、ここまでじっくり文章を読んでいなかったことに改めて気がついた」など、読解力の重要性を実感したという感想の声が聞かれました。

三森　図解という作業を通して丁寧に読解させるというのはとてもよい発想ですね。私も図解させる指導を積極的に取り入れています。しかし、それは評論に限らず、文学作品でもできます。様々な種類の作品で取り組むことで、生徒は学んだスキルがいろいろな状況に応用できることに気づくはずです。

ただ、そうした授業は素晴らしいと思う半面、それがもし個人の実践にとどまっていて、組織的な授業改善につながっていないとしたら、とてももったいないことであり、日本の学校教育の大きな問題点だと私は感じます。

對馬　個人の実践にとどめず、学校内外に実践を知ってもらうことは、教師が自身の授業改善に向けた視点を得るチャンスになると私も思います。本校でも、学校のウェブサイトを通じて授業実践を学校内外に共有し、組織的な授業改善を目指しています（＊）。

對馬先生の実践例　『羅生門』を題材にした国語と英語の教科横断型授業

◎授業の概要とポイント

登場人物の下人が最後に発する「きっと、そうか。」という言葉の英訳に取り組んだ。生徒だけでなく、翻訳者や英語科の教師の英訳も鑑賞し、多様な解釈・表現に触れて作品の読解を深めた。

◎生徒による英訳例

グループで考えた英訳	その日本語訳	解説・意図・ポイント
I see.I'm not wrong.	そうか、きっと俺は間違っていないな。	「right」ではなく、遠回しに「not wrong」にした。正しいと言い切るのではなく、間違っていないと記すことで、若干の妥協を表現した。
Will you forgive me too?	「お前も許すか?」	念を押しているという表現から疑問文にした。老婆が開き直って髪を抜く行動を正当化しているから。
I have no other way too. That's why,whatever I do, she won't hate me.	もうほかに生きる道がない。だから俺が何をしようと、こいつは私を恨まないだろう。	老婆が「仕方のないことだから許される」ということを言っていて、それに対して下人は「じゃあきっと俺も許される」と思ったからだと考えた。
I see.	そうか。	この発言は意図せず口から出たもので、「きっと、そうか。」に対応するように短いフレーズで英訳してみた。

◎翻訳者・英語科の教師による英訳例

You're sure she would, eh?	この女はお前のすることをきっと理解してくれる。そうなんだろ?
That's what I should.	それが俺のすべきことか。
Then so be it.	それなら、そうしよう。
This is humans.	これが人間なのだな。

◎生徒による振り返り

「日本語を英語に翻訳することで、内容に関する理解が進み、登場人物がどのような心情でその言葉を発したのかを深く考えることができました。また、考えたことを他者と共有することで、より深い理解につながることが分かりました」

※對馬先生の提供資料を基に編集部で作成。

生徒が間違いを恐れずに議論し合える場づくりを

三森　読解力の育成において、私が課題の1つだと感じているのは、「正解を言わなければ」という思いにとらわれている子どもが多いことです。日本の学校も、もっと子どもたちが自分の意見を恐れずに表現できる場にすることが必要です。

私は、授業などで最初に勇気を振り絞って意見を言った生徒に対して、「ありがとう。すごくよい意見だね」などと感謝の言葉をかけるようにしています。仮にその意見が妥当でない場合は、ほかの生徒から「私はそうは思わない」などと異議が表明されることが理想です。ただそのような時も、私は最初に発言した生徒の貢献に注目させるために、「あの意見があったからこそ、皆さんは自分の意見と比較し、考えを深めることができました」などと最初の意見の価値を生徒たちと確認します。そうしたやり取りを繰り返すうちに、生徒は意見を言うことは自分が所属する集団に対する貢献なのだと理解し、間違いを恐れずに発言するようになります。そして、生徒間で議論が白熱しても、授業の終了の鐘が鳴れば、後腐れなく、その後の学校生活を営めるよう

＊ 市立札幌藻岩高校のウェブサイトでは、對馬先生が所属する国語科などの教育実践を公開している。
https://www23.sapporo-c.ed.jp/moiwa/index.cfm/26,0,72,html

な関係性が構築されていきます。

對馬　人ではなく、意見を批判し合える、そうした安全・安心な場づくりは、生徒にとっても、私たち大人にとっても大切なことだと思います。

三森　企業に入社してすぐに辞める社員が多いのは、少し批判されると、自分という人間が否定された気持ちになるからかもしれません。批判する対象はあくまでも意見そのものであり、意見を発した個人ではないという認識を、学校での学びを通じて浸透させることはとても重要なことだと私は思います。

日頃から教師が質問をし、読解力を育む

三森　読解は、「なぜ」「どうして」という疑問から始まります。教師が日頃から質問を繰り返すことで、生徒は理由や根拠をしっかりと考えながら読み、そして理路整然と話せるようになっていきます。そうしたクリティカルシンキングのスキルが身につくと、他者の意見に対しても、「ここがおかしい」「こうすればよい」と、すぐに気づけるようになります。

對馬　私も生徒に質問することを大切にしています。先日、生徒が授業の振り返りで、「先生は授業で『なぜ』『どうして』と本質を追究するように繰り返し聞くけど、どんな意見も受け入れてくれるから話しやすい」と言ってくれたことはとてもうれしかったです。

三森　教師の説明に対して生徒から、「私は先生の説明よりも、こう説明する方がより論理的だと思います」といった提案が出てくるようになるのが理想です。そのためには、生徒に「なぜ」「どうして」と問うスキルを教師が磨くとともに、自分も学び手の1人として、生徒と対話を重ねているのだと自覚することが大切です。

對馬　三森さんのお話を聞いて、物事を「なぜ」「どうして」と批判的に読み解く力を生徒に育むことが、生徒自身や社会をよりよく変えていくことにつながるのだと感じました。生徒の人生を豊かなものにするために、読解力の育成に今後も取り組んでいきたいと思います。

本特集を振り返って

学校の中に読解力を発揮する〝社会〟を創る

VIEWnext編集部　統括責任者　柏木　崇

本特集の冒頭で、読者の先生方とともに考えたい「問い」として、「今後求められる読解力とはどのような力で、それをどのようにして育むのか？」と投げかけさせていただきました。その問いを探究するため、読解力の育成に課題意識を持つ識者や現場の教師に、今後求められる読解力についてお話しいただきましたが、そこには多くの共通点がありました。

その1つが、読解力はテキストに書かれていることを理解する力にとどまらず、理解したことを自分なりに解釈・評価し、それを他者に分かりやすく伝える力までを含むという点です。また、解釈・評価の際には批判的な視点が求められるという点も共通していました。正しいかどうか、立場を変えるとどうかなど、多面的・多角的、そして分析的に物事を見ることができる力も、読解力を構成する要素ということです。さらに、解釈・評価し、他者に分かりやすく伝える際に求められるものとして共通して挙げられていたのが論理性であり、それを裏づけるエビデンスでした。

そのように、今後求められる読解力は、複数の要素から成る総合的な資質・能力であり、だからこそ、どの教科・科目においても育成すべき力であることは、現場の教師の実践にも見られた通りです。そしてそれは、PISA型読解力の説明の中に「効果的に社会に参加するために」とあるように、社会で生きて働く資質・能力であることからも、その育成の鍵は、社会に開かれた教育活動を行うことにあると考えます。すなわち、読解の対象を文章だけではなく、図表やグラフといった非連続型テキストとすることを始めとして、社会で想定される読解の場面が経験できる探究学習や他者との対話的な活動など、生徒が読解力を発揮する〝社会〟を、学校の中にこれまで以上に創っていくことが今、求められているのではないでしょうか。